

雪割り草の詩^{うた}

— 幼い頃の島の日々



森 佐美雄

はじめに

佐渡が島は、東京からは遠い。本州側の新潟市までも、通常、船で二時間余はかかり、人々は簡単に移動できない。そのためであろう、風習、文化といったものが、中央よりは一步も二歩も遅れて波及し流れて行くことになった。それによって、自然の変化や荒廃も少しばかり遅れたようだ。このことは、嘗ては日本全国に居たと云う朱鷺が、この佐渡に最後に生き残ったことにも現れているのではないだろうか。私が幼く、物心のついたのはこの佐渡・相川町（注、これは当時の地名であり、現在の佐渡市の相川・金山地域を指す。本書では、以下、全て地名は、当時のものを使用する）であり、昭和初期の、戦争末期から戦後にかけてであった。

その頃の相川町には、江戸期や明治・大正時代に見かけられた自然や生活・習慣などが、なおも残されていたと思われる。勿論、同時期には他の地方でも、同様な環境・生活の所があり、珍しくはなかったかも知れない。ともあれ、私が幼

少年の頃に目にした町の姿は、現在にて、広く辺りに見られる自然や生活様式とは、かなり違ったものであった。

本書は、戦後の相川町を舞台に、幼い私の目に映った自然や生活そして人々の心を語り、それらを懐かしみながら、現在に紹介する随筆集である。

佐渡は、夏季は比較的穏やかな所であるが、冬は北西からの季節風が強く吹いて、厳しい気候である。しかし、その周囲を海に囲まれ、そこに南西方面からの対馬暖流が流れているために、新潟などの本土側と比べ、夏・冬とも気候がいくらか緩和され、やや過ぎし易いと言えそうだ。そして、この海があるために、古くから日本の南北を結ぶ海上航路の中継地として、その積荷や船乗り達を通して、様々な遠い地域の文化がもたらされて来たと言われている。

この地は、このような風習・文化に加えて、古くは中央の政争に敗れた流人のもたらす影響を受けてきたし、また、その後の金山の発見と繁栄により、佐渡・相川町に徳川幕府の佐渡奉行所が置かれ、これにより武家の文化も流入して来たという。この佐渡金山は、江戸時代から明治・大正と続き、所有者も、皇室、次いで三菱企業グループと変わって、昭和に入り私が小学校を終える頃の大縮小まで、約三百五十年もの間、本格的に経営され採掘されていた。それだけに、私の幼少の頃

には、町は、人口も多く、活気があり賑わっていた。しかしながら、この大縮小のあと、金山が下火になると、代わって観光業が主体となって現在に到っているが、その賑わいは、金山が栄えていた頃ほどではないようだ。

佐渡は、このような経緯を辿ったあと、中央から遠いという、先にも述べたような地理的条件のために、自然や文化が、時代の流れから遅れながら、少しずつ次第に変わってきていると言えそうだ。

本書を、佐渡という一地方、一時代の話として捉えるのではなく、昔の我が国に至る所に見られた姿が、この地では、江戸、明治、大正と受け継がれてきて、昭和初期の、私の幼い頃にも残っていたものと理解して、読んで頂きたいと思う。そして、現在の社会・環境に関する様々な問題などについて、何か役立つヒントを得て貰えれば幸いである。

目 次

目次

はじめに	1
我が町の遠景	10
一、美しい自然	17
雪割り草	18
あさつき・わらび	20
ほたる	23
海・浜	26
川	34
スジボソヤマキ蝶	37

雪景色 40

二、遊びの数々 43

ふな釣り 44

かけっこ 49

魚取り 51

海水浴 57

将棋 64

石けり 68

ちよんちよん 70

ビイだま 74

かるた・トランプ 77

雪すべり 79

そのほかの遊び 83

三、昔の生活…………… 91

かまど…………… 92

たきぎ取り…………… 96

たきぎ作り…………… 100

井戸と水汲み…………… 103

鳴子と稲刈り…………… 106

大家族生活…………… 110

四、人々の心…………… 119

トロッコの運転手…………… 120

湯のみ茶碗…………… 122

祭りの夜…………… 125

竹竿と爪…………… 129

祖母、母、そして父 …………… 133

あどがき …………… 161

我が町の遠景

相川町の表情を文章で表すことはなかなか難しい。季節の移り変わりで言えば、雲が切れ始め、空が少しづつ明るくなり光を増してくる早春から、花開き草萌える春。春が過ぎるとすぐに青葉若葉が風に揺れ、生き物が活動する夏。そして、一陣の風に始まり、涼しさや穏やかさ、そして夜の静けさが支配する中にも、やがて訪れる冬の予感に息を潜めるような秋。それも間もなく、幾日も雲が垂れ込め、冷たい雨から次第に曇や雪に変わり、その後は絶え間なく、強風、波浪、曇や雪の日々が続き、ありとあらゆる自然の試練が襲い掛かり、ひたすらこれを耐え忍ぶ暗く長い冬。（注、今は、冬はそれほどでもないらしい。これは地球温暖化のせいであろうか）このように四季折々の表情が極端に変化して現れる所であった。

町の位置は、大佐渡山脈が島の北側を占めて南西から北東に伸びる、その南西側の端にある二見半島の近く、日本海に面した、北緯38度線の通る辺りである。そこ